56）前頭円蓋部上皮性嚢胞の一例

本橋　蔵・亀山　元信
今泉　茂樹・三野　正樹（仙台市立病院 脳神経外科）
小沼　武英

症例は60歳女性，構語障害と歩行障害を主訴に来院した．頭部 CT では右前頭円蓋部に直径約 6 cm の円形低吸収域を認め正中偏位と脳室圧排がみられた．造影効果は見られなかった．嚢胞壁切開とくも膜下腔との交通を形成した．術後経過は良好で外来通院されていたが 5 年後に嚢胞の再増大を認めたため嚢胞腹腔短絡術を行った．電顕所見から最終診断は上皮性嚢胞であった．光顕では嚢胞は一層の偏平な上皮と結合組織からなっていた．電顕では microvilli と基底膜を有する非繊毛上皮からなっており，endoplasmic reticulum, mitochondria に富み desmosme で連結していた．細胞膜の interdigitation はみられなかった．“上皮性嚢胞”という用語は異なる様々な名称が用いられており，概念が混乱しているように見受けられる．用語や治療法の選択について過去の報告に基づいて考察する．

57）梗塞による下垂体卒中にて発症した下垂体腺腫の一例

加藤　秀明・高橋　俊栄（大宮赤十字病院 脳神経外科）
岡田　仁志・金子　宇一

梗塞による下垂体卒中は比較的稀とされている．今回我々は梗塞にて発症した下垂体腺腫の一例を経験したので報告する．症例は69歳男性．平成12年 2 月 2 日に突然右眼窩を主体とする頭痛，悪心が出現，その後復視，右眼瞼下垂が生じ近医受診，頭部 MRI にて下垂体腫瘍を指摘されていた．鎮痛目的でアスピリンを連用したところ吐血を生じ，当院内科に緊急入院．内視鏡的治療後，当科転科となった．転科時，右視力障害，両側上耳側 1 / 4 盲，右動眼神経，滑車神経，外転神経麻痺を認めた他，汎下垂体機能低下の所見がみられた．頭部 MRI では鞍内から上方へ突出し右海綿静脈洞に及び，Gd にて周辺が増強される腫瘍性病変を認めた．3 月 2 日経蝶形骨洞下垂体腫瘍摘出術を施行した．術中所見で腫瘍はみられず黄色の debris 様の内容物が充満していた．病理組織診断では壊死組織と Ghost 化した僅かな腺腫細胞を認め，下垂体腺腫に梗塞が生じたものと推察された．術後眼症状は改善し，外来にてホルモン補充療法を施行中である．

58）周産期の薬物療法中に腫瘍内出血を繰り返した下垂体腺腫の一例

小川　欣一・清水　幸彦（岩手県立胆沢病院 脳神経外科）
大和田健司
池田　秀敏（東北大学 脳神経外科）

【症例】26歳，女性．【現病歴】1996 年頃より無月経．1998 年に結婚後も妊娠を得られず，1999 年になり近医（産婦人科）を受診．高プロラクチン血症を指摘され bromocroptin の服薬を開始．2 ヶ月後より月経の再来が認められ妊娠．服薬を継続していたが，妊娠第 8 週時に突然の耐え難い頭痛を自覚し，数日間臥床を余儀無くされる．これ以降の服薬を自己判断で中止し，無事出産．出産後，腫瘍の存在と動態を心配し当科外来受診した．【現症】意識清明，神経学的には特記すべきことはなかったが，ホルモン基礎値はプロラクチン 230 ng/ml，また LH, FSH はいずれも低値を示していた．頭部画像診断ではトルコ鞍部に，内部に血腫を伴う腫瘍像が認められた．2000 年 7 月13日経蝶経骨洞腫瘍摘出術を施行，病理診断では plurihormonal adenoma であった．【考案】下垂体腺腫は全脳腫瘍中，最も腫瘍内出血を来しやすいことで知られるが，bromocriptin 投与，妊娠のいずれもがそのリスクを増大させる．画像所見を踏まえて，治療方針に関し考察する．

59）下垂体腺腫内に大きなラトケ嚢胞の形成をみた一例

藤原　和則・斎藤　桂一（岩手県立磐井病院 脳神経外科）
えび名　勉
池田　秀敏（東北大学 脳神経外科）

症例は35歳の男性．約 1 ヶ月前から進行性の視力障害が出現し，当科紹介となった．入院時，両側の視力障害および両耳側半盲を認めたが，血中下垂体ホルモン基礎値は正常であった．CT では鞍上部に石灰化を伴わない嚢胞性病変を認めた．MRI にて，T 1 slight low, T 2 high signal の大きな嚢胞性病変のみを認め，明らかな腫瘍実質成分は見られないことからラトケ嚢胞を疑った．Transsphenoidal approach にて手術を行った．著明に非薄化した鞍底の骨を除去した後に，硬膜を切開するとキサントクロミーな内溶液が流出した．さらに，嚢胞内腔には光沢を持った白い膜構造を認め，後の病理組織学的検索にてラトケ嚢胞であった．アルコール処理